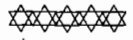


臨調・行革粉碎！ 三里塚ジェット闘争勝利！

民同労働運動の限界をつきやぶるもの—— 動労千葉の三里塚労働運動路線にますます確信

感想文

『戦後労働運動史から——民同労働運動批判』 講師・高島喜久男氏 労働学校に参加して



第五回講座は、八月二五日、講師に労働学校の学長であり、労働運動研究家の高島喜久男氏をむかえて、「戦後労働運動史から——民同労働運動批判」をテーマに講義がおこなわれました。受講生の感想文を掲載します。

民同労働運動について

講義は、第一に今日の総評労働運動の中心といわれるいわゆる民同はどのように発生してきたのか、またどのような考え方をもっていたのか。第二に、民同が突然として生まれたものではないこと。戦後の日本共産党の指導のもとに徐々に育って今日の総評が育ってきたこと。第三に、こうした民同の運動と対立する運動が生まれてきたこと、の三段階に分けて時代の流れに沿って講義がされました。

民同の誕生と総評の結成

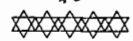
総評が結成に至るまで迂余曲折があり、戦後日本共産党の強い指導下にあつて占領軍指令部の工作や産別会議の中に共産党に反対する運動が生まれ、自主性の尊重を求めた民主化運動がおきたこと。当時としては、国鉄反共民主化運動、総同盟民主化運動、産別民主化運動などがおきたが、いずれも総評の結成までには至らず、そうした中で私鉄Ⅱ中立系を中心とした組合が呼びかけ、総同盟と合体して総評の結成に至ったこと。また結成された総評が、大企業労組Ⅱ従業員組合を中心として組織化され、運営のリーダーシップをとったために中小企業の代表が構成員にもなれず、当初発言権・議決権などなかったことや、また一九五六年の総評大会は一名増の代議員をめぐって大荒れになり、大会が一日遅れて開会したこと等、が話されました。

今日、「右翼労働統一」が叫ばれる中で、一九六二～二年ごろから労働統一がいわれるようになり、一九七〇年一月に民間主要単産委員長による労働組合懇談会がつけられ、これが今日の全労協の母体となったことが話されました。

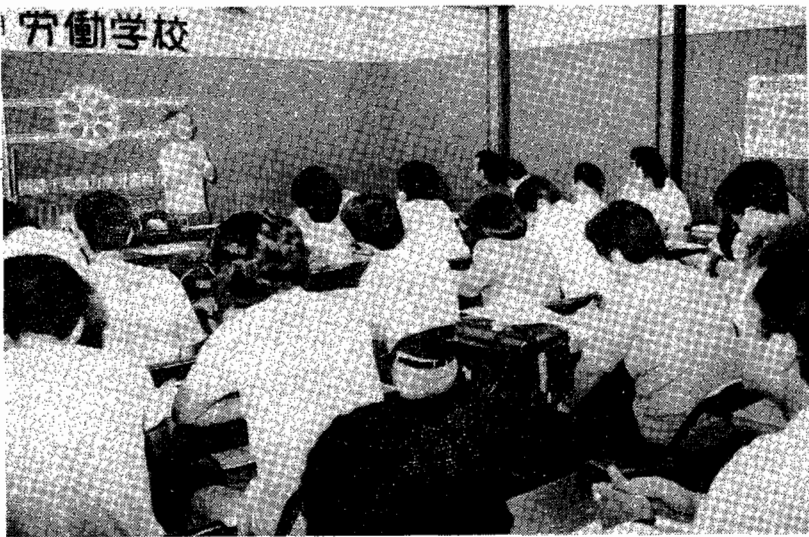
総評結成の中心となった勢力の思想が、大きくは四つに分けられ、第一に独立について全面講和か単独講和か、第二に、反ソ・反米の中立、第三に経済復興、第四に、総資本対総労働があり、またそれに反対する勢力があったこと、そうした中で労働者同志会が結成され、のちの民同になったことが話されました。

戦後革命的高揚期

（聴講・S生）



高島講師は、戦後の労働運動の中で、当時買収求めた電熱器を例に出し、現在大企業にのしかかっている企業が戦後はそういうものしか出来なかつた時期に自然発生的に生産管理闘争が生まれ、生きていくための闘いは一九四六年六月、占領軍指令部が生産管理闘争を違法としたことに対して日本共産党はこれを受け入れたがために、闘いの火が消えてしまったこと。もし一九四六年六月以前に目的意識的に強い指導、方針があつたならば資本主義は変わっていたのではないか。この時期はその意味で革命的な高揚期であつたことが述べられ、さらに追いつきをかけるように総同盟が権力を導入して共産党員を速補させ、まさに今日の動労「本部」革マルと同じであるといわれました。さらにさまざまな労働運動にたざさわつて来られた中で、政治闘争を闘わねばならないことが力説されました。また、氏がレバノンへ旅行した話も非常に興味をおぼえました。講師の長年にわたる運動の経験をまじえながら、動労千葉とのかかわり等もよりこみ、短い時間でしたが、戦後労働運動の一端を垣間みた気がしました。



永年の体験を通して、労働運動の教訓を語られる高島講師。